

認定看護師から学ぶ

地域の心不全患者の生活を看る・支える

<心不全の定義>

『心不全とは、心臓が悪いために、息切れやむくみが起こり、だんだん悪くなり、生命を縮める病気です』

急性・慢性心不全診療ガイドライン（2017年改訂版）

心不全は増悪による再入院を繰り返し、病状が進行していきます。治療の効果があれば嘘のように症状が楽になるため、患者や家族は「よくなった・治った」と思ってしまうことも多くあります。救急車を呼ぶような状態となり重症化し、入院期間が長くなることも多くあります。このような入退院を繰り返し、徐々に体力や治療の効果も低下し、死を迎えていく特徴も持ちます。

秦野赤十字病院では、心不全患者さんが入退院を繰り返さず、安心して自宅で長く過ごせるように、多職種で支援を行っています。

心不全での入退院を繰り返さないためには、自宅でのセルフモニタリングとセルフケアマネジメントが大切です。そこからの早期受診行動が大切になってきます。自宅での体重測定・血圧測定・症状の観察の3つのセルフモニタリングが要になります。簡単にできるように感じますが、心不全患者さんの取り巻く環境は様々です。一人一人の生活背景や価値観を考え、個々に合わせたセルフケア支援や介入が必要となってきます。

また心不全は癌と違い、予後予測が難しく、急性増悪した場合は治療の効果がなく、そのまま亡くなるパターンも少なくありません。そして末期の心不全では、最期の瞬間が近づいて来ていることはわかるが、今日看取りということがわからないことも少なくありません。

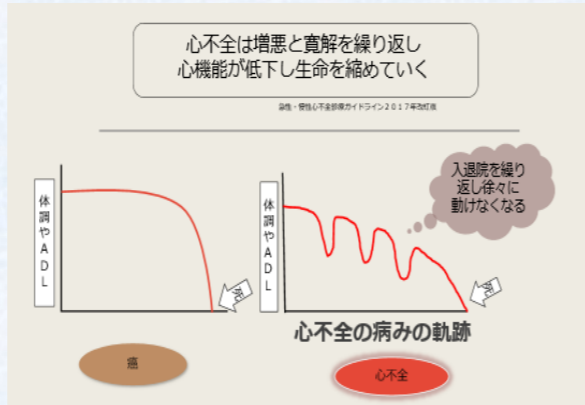
ACPを行い、多職種と連携し、在宅での看取りを希望された心不全患者さんの介入も行っています。

アドバンス・ケア・プランニング (ACP)

患者・家族の価値観や目標を理解し、これからの人生の計画も含んだ治療・ケアに関する話し合いのプロセスのこと

今後は、心不全患者さんの意思決定支援にも積極的に取り組んでいく予定です。

慢性心不全看護認定看護師 内田 寿恵



ピーなっつうしん

Vol.19
2022.11



当院の昨年一年間の実績を評価され、当院が日本脳卒中学会一次脳卒中センターに認定されました。

当院では、消化器センターに続く第2のセンターとして脳卒中センターを立ち上げるために、現在準備を進めております。

今後ますます強化される当院の脳卒中への対応に、どうぞご期待ください！

知っておきたい医療の知識 「皮膚科疾患のお話」

認定看護師から学ぶ 「地域の心不全患者の生活を看る・支える」

秦野市の特産品「ピーナッツ」の花言葉は、「仲良し・楽しみ」。生活に役立つ情報や当院の魅力などを提供し、地域の皆さんと病院とのコミュニケーションツールになる広報誌を目指します。

QRコードを読み取ると、当院ホームページへアクセスでき、最新のお知らせをご確認いただけます。



赤十字の歴史や日本赤十字社の所蔵史料を紹介する新ウェブサイト「赤十字WEBミュージアム」をオープンいたしました。赤十字創設以来の「救いたい」という「こころの灯」を受け継ぐインターネット上の博物館です。赤十字情報プラザ（本社1階）に来館せずとも所蔵品を見ることが可能になりましたので、ぜひご覧ください。

病院からのお知らせ ～選定療養費の金額が変わりました～

国は近年、医療機関の機能分担と相互連携を推進するため、診療報酬において「初診・再診時の選定療養費制度」を定めています。

この制度は、「初期診療は医院や診療所などの“かかりつけ医”で行い、高度・専門医療は病院（200床以上）で行う」ことを推進するもので、その金額は病院ごとに定めて良いこととされております。

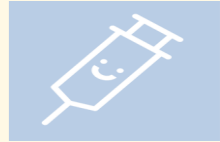
令和4年4月の診療報酬改定において選定療養費制度が強化されたことを受けて、当院においても10月1日より下記のとおり選定療養費の改訂を行っております。

●初診時に他の医療機関からの「紹介状」をお持ちでない方

令和4年9月30日まで
3,300円(税込)



令和4年10月1日から
5,500円(税込)



皮膚科疾患 のお話

頭のとっぺんからつま先まで、外界に晒されている皮膚表面には様々な変化が生じ得ます。また病気のメカニズムとしても、外から病原体が侵入することが原因の感染症をはじめ、日光の影響、動植物との接触によるもの、アトピー性皮膚炎など炎症性疾患、腫瘍、膠原病など様々あり、皮膚科を受診する契機となる病気には色々なものがあります。



蜂窩織炎・丹毒

足
や顔面などが急激に腫れてきて熱を持つてくるような病気に、蜂窩織炎や丹毒があります。身近にいる細菌が皮膚の傷口などから侵入、増殖して症状を生じます。適切な抗生剤を内服すれば快方に向かいますが、痛みや炎症が強いと入院して抗生剤の点滴投与などが必要なこともあります。腫れや紅みなど症状が似ていても、原因が身近な細菌とは限りません。頻度は高くはありませんが、土壌などに広く分布している真菌などが原因である場合や、マダニに噛まれて生じる感染症などは通常の抗生剤治療では改善しないことがあり注意が必要です。症状の経過や所見、検査結果から診断に近づいていく必要があります。受診した際には正確な経過を申告して頂くことが大切になります。

带状疱疹

帯
状疱疹は皮膚科外来で頻度の高い疾患でウイルスが原因ですが、外から新たに侵

湿疹

湿
疹はよくある皮膚トラブルの一つです。かぶれの直接的な要因となるものが分かればそれと接しないことで改善しますが、体質的に全身に湿疹が生じやすいアトピー性皮膚炎で悩んでいる方も多くいらつしゃいます。治療としては保湿剤や炎症を抑えるためのステロイド外用、痒みを抑える内服薬などが基本ですが、そうした治療でもなかなか病勢のコントロールが難しい方もおられました。近年の医薬品の進歩からここ数年の間に抗体薬など新規の治療法が誕生し、

皮膚腫瘍

難治性の症状も改善がみられるようになってきています。皮膚の紅みが主体で一見湿疹のように見えても、膠原病が背景にありその皮膚症状のこともありますので、治療の前に正しい診断が大切です。

皮
膚には様々な種類の腫瘍が生じ得ます。そのままでも生命に問題のない良性のもの、進行すると命取りとなる可能性のある悪性ものがあります。悪性腫瘍の治療は取り切れるのであれば切除が基本ですが、患者さんが高齢などで全身状態が良くないともそもそも手術が不可能な場合もあります。



ダーモスコピー (dermoscopy)

皮膚の腫瘍やホクロなどの色素病変を診る時に、ダーモスコピーという特殊な拡大鏡を使用し、ホクロ等の色素病変を観察する検査です。普通のホクロか、または癌なのかを判断したり、どのような皮膚の腫瘍なのかを診断したりするときに使用します。

乾燥・掻痒・水疱症

加
また皮膚癌が直接的な死因にならないのであれば（他に抱えている病気で寿命を迎える可能性が高いため）、皮膚癌は治療しないでそのままとする状況もありますが、進行すると出血を繰り返したり悪臭を伴ったりすることがあります。そのような状況に陥る前に診断・治療に結びつけられることはケアの面からみても有益です。

加
齢や乾燥などが要因となり全身の皮膚が痒くなることは多くみられますが、中には免疫の誤作動により痒みや水疱が生じる病気もあります。関節リウマチは自己免疫疾患として有名ですが、自分の皮膚に対しても自分の免疫が反応してしまう病気があります。水疱性類天疱瘡などに代表される水疱症は、ある時から自然に紅みや水ぶくれが全身に生じてくる病気で高齢者を中心にみられます。食べ物に関係ありませんし、生活スタイルとも関係ありませんが、全身の皮膚が熱傷のように爛れたり、水がしみ出して服が濡れてしまったたり手当が大変になることがあります。治りにくい口内炎のような症状が初発症状などの皮疹が生じた際には注意が必要です。

円形脱毛症

白
己免疫と関連していると言われていた病気に円形脱毛症もあります。円形脱毛症も程度は様々で、コイン大くらいの脱毛で自然に治ってしまう程度のものから、頭髮が全て抜けてしまい難治性のもまであります。確実に改善させる治療法は確立されていませんが、脱毛を生じさせている免疫反応を回避させることを目的とした免疫療法などを当科でも行っています。

皮膚にはこのように様々なトラブルや病気が生じることがありますので、皮膚でお困りの際には皮膚科の受診をお勧めします。病態や治療内容によっては関係各科とも連携を図って治療してゆきます。

今月号の

秦野日赤人+

皮膚科部長

うんの としのり
海野 俊徳

〈資格・所属学会〉
日本皮膚科学会皮膚科専門医